

看護福祉学部を振り返って ～思いつくまま～

野 川 道 子

看護福祉学部ってなに

看護福祉学部は1993年（平成5）、東日本学園大学（1994年から北海道医療大学に名称変更）が20周年を迎えたときに開設されました。それまでは薬学部と歯学部という学究重視のリッチなイメージのある2学部体制でしたから、実践重視で庶民的なイメージのある看護と福祉の学部を開設するというのは、大学にとって、より地域住民のニーズに応えるようシフトするという大きな決断の現れではなかったかと思います。

当時を振り返りますと、北海道の看護教育は専門学校や短大が、社会福祉教育は大学が中心となって牽引していました。北海道の看護にとって4年生大学での教育は初めての登場であり、全国的にみてもまだ22大学でした（2013年度は219校）。特に、看護福祉学部という命名は斬新でした。広く社会全体の問題を扱う社会福祉学と健康問題に焦点化した看護学との統合はどのように実現できるのか。文部科学省の設置審においても、学術の立場から看護と福祉の統合に危惧もつ委員がおり、議論を戦わせたところ、初代学部長の中島紀恵子先生はその当時を振り返っています（中島、2013）。中島先生は看護学と福祉学、両方の大学で教鞭を執った経験から、21世紀を担う人材養成の観点で「ヘルスケア」を基軸においた看護教育と社会福祉教育を結合させる構想を具現化したと述べられています。

開設当初、看護と福祉を統合した看護福祉学という学問は成立するのかという議論がありました。看護も福祉も国家資格を目指しての職業教育という側面があることから、指定科目の縛りの中で、統合した教育を行うことは至難の業でした。授業科目としては、1年次に「看護福祉学入門」を配置し、看護と福祉の学生が、人間として生きるうえでの大きな課題である「生老病死」について共に学ぶという場を設けるにとどまりました。

看護福祉学部が創設11年目を迎えた2003年12月、第3代学部長・阿保順子先生のもと、北海道医療大学看護福祉学部学会が学術団体として発足し、2004年から年1回の学術大会、学術誌の発行がスタートしました。初期の学術大会に、当時学長だった廣重力先生が参加されて、「看護学と福祉学の統合は実現可能か」という問いを寄せられました。そのとき、現在、臨床福祉学科の今野多美子先生が、本研究科の修士学生として参加されており、長年、地域医療の現場で活躍してきた経験から、「学問としての統合はともかく、地域医療の現場においては、看護と福祉の連携は不可欠であり、統合されたケアが提供されています」と力強く発言されました。現在、チーム医療ということが盛んに言われていますが、超高齢社会を迎えた日本において、健康と福祉の課題は密着しており、社会で生活する人々の尊厳をまもるには、健康と福祉のどちらを欠いても成り立たない時代に突入していることは事実です。

看護福祉学入門の授業やサークル活動を通じて、幸い看護と福祉の学生の交流が行われています。何人かの学生に聞いたところ、医療の総合大学に入学したのだから、せめて、最終学年のときにもう一度、看護と福祉の学生が共に学びあう機会が欲しいという意見でした。是非とも実現させたいものです。

学生との思い出あれこれ

<学生の気風について>

2013年度（平成25）の学部の入学生は21期生です。1期生、2期生との出会いは鮮烈でした。看護学生というと黒髪にリクルートスーツに身を包んでいるという印象でしたが、本学の学生は髪型も服装もさまざまで、一人ひとりが、おしゃれにこだわりがあるようでした。最初、何人かの学生の髪色やお化粧が実習施設で受け入れられるだろうかと心配しました。せめて黒髪にするよう指導しようかとも思いましたが、本学部にはそのようなことをしなくとも許されるような救いがありました。それは初代学部長・中島紀恵子先生の個性的な姿でした。チェリーピンク・紫の髪、意思の強さを感じる大きな目と紅桃色の唇。「おしゃれをしない人間は、人間であることをさぼっている」と主張されているように思えました。その先生の姿に背中を押されて、若者は目立たないより、若者らしさを醸し出して

いる方が、患者さんにとっても好ましいだろうという考え方に切り替えることができました。

ある病院での実習反省会のときのことです。一人の指導者さんから、本学の学生の前髪のカールが派手すぎるという注意を受けました。それに対して私は、清潔という点では問題のない髪型であること、年齢以上に地味すぎる髪型ではかえって患者さんの気持ちも暗くするのではないかなどという暴言を吐いてしまいました。指導者さんにとってはショックだったと思いますが、それ以来、髪型で注意を受けることは少なくなりました。本学はナースキャップをはずすのも、看護衣をスカートからパンツスタイルに切り替えるのも先陣を切っていたので、周囲を驚かせることは多々ありましたが、理にかなっていない常識や習慣であればそれを疑い、打ち破り、正していくというのは、中島先生が語らずとも、発していたメッセージではないかと思います。

<授業について>

看護福祉学部開設当初はこれといったモデルがない中で、日々、大学の授業を作り上げる必要がありました。私にとっては、ここが教員としての最初のスタート地点でした。成人看護学講座の講師として「治療看護論演習」を担当するよう言われましたが“治療看護”という科目名はその当時、耳慣れないものでした。医学的治療に関連する看護でなく、看護そのものに治療的機能があるという前提に立って組み立てる授業でした。ホリスティックな看護、代替療法を取り入れた看護が求められましたが、どの教員にもそのような知識や技術はなく、それらしい洋書を読みあさり、気功、指圧、アロマセラピーなどをにわか勉強して、なんとか授業を組みました。

10月のことです。リラクセーションの授業は、学生に体育館に仰向けに寝てもらって、目を閉じて、雨音、鯨の声など、α波を発するCDを聴いてもらうことから始めました。シーンと静まり返る館内にシトシトと身体に染み渡るやさしい雨音と思いきや、突如、バラバラと校舎の屋根を叩く激しい雨音が館内に響き渡りました。それは北海道の冬の到来を知らせる、雨混じりの雪、時雨の仕業でした。学生はリラクセーションどころか寒さに身体を震わせていました。そこで、急遽、身体を温めるためにマッサージの授業に切り替えましたが、学生にとっては忍従体験だったと思います。卒業後、その当時の学生に聞くと、あのときは、寒さで体温を奪われて風邪をひきそうだったとのことでした。わけはわからないが悪戦苦闘している新米教員の心情をおもんばかって、寒いとは言い出せなかったのだと思います。付き合ってくれて本当にありがとう。学生の懐の大きさに頭が下がる思いです。

今、その授業で受け継がれているのは、具体的な技術としては、マッサージだけになりましたが、人を宇宙や自然のリズムとの調和の中で生きているホリスティックな存在として捉えてケアする看護に立ち返ることのできる良い機会でした。

<通勤・通学事情>

石狩平野に抱かれた北海道医療大学は四季折々に変化する自然を満喫させてくれます。フキノトウが芽吹き、白鳥が飛来する春、カエルの合唱に包まれ、羽虫に悩まされる夏、稲刈りを終えた田んぼと緑肥となるひまわり畑が突如現れる秋、そして自然が猛威を振るう冬。通学路・通勤路はブリザードに阻まれ、ホワイトアウトの恐怖を何度も味わってきましたがこの地とこの大学が嫌いになれません。冬になると同僚や職員の方々との会話が増えます。「今日の吹雪は大変だったね、今日は何時に帰る、一緒に帰ろうか」などなのです。自然と助け合いの心が芽生え、凝集性が高まります。

これは、夏のことでしたが、強風に見舞われ、JRのディーゼルカーが石狩太美～あいの里公園間の石狩川橋梁を渡れず、学生と共に3時間ほど車内に閉じ込められたことがありました。実習記録の提出日が迫っていたこともあり、車内は一転、教室と化し、複数の学生が、座席にアセスメント用紙を広げて熱心に書き込み始めました。そして、しばらくすると、ハッピーバースデイの歌声が流れ始めました。その日、誕生日だった学生を囲んでのジュースでの乾杯、くったくのない笑い声、学生と共に過ごしたその時間が、私の脳裏に映画のワンシーンのように刻まれています。

この大学への通勤・通学で自然のやさしさと厳しさを味わうことで、不思議と心の層も厚くなっていくようです。通勤・通学が安全であることにこしたことはありませんが、自然が与えるハプニングを経験することで、都会の通勤では味わえない醍醐味を感じていることも事実です。

新医療人育成の北の拠点を目指す

<事業の立ち上げ>

「新医療人育成の北の拠点を目指す」というのは本学の行動目標であり、元学長・廣重力先生が2004年に掲げたも

のです。この行動目標により、看護福祉学部も学部として目指すべき方向が定まりました。地域社会が求める保健医療福祉の人材養成です。これに呼応して2005年、特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を用いて水準の高い看護実践のできる認定看護師の養成を3分野（感染看護、皮膚排泄ケア、緩和ケア）でスタートさせました。大学教育とは異なるスペシャリストの研修であり、何故、大学で実施するのかという問いかけもありましたが、その当時、認定看護師数は全国で1,741名のところ北海道はわずかに58名と決定的に少ない状況でした。認定看護師の活躍は医療の安全、質の向上につながることは目に見えていましたから、行動目標に照らし、やるべくして着手した事業でした。

その当時の理事長だった故・寺田一壽男先生は、授業料をなるべく安く設定するよう指示されました。東京方面からも多数の教員を招いての質の高い教育ですから、他の研修機関と同程度の授業料に設定しても良いのではないかとお伝えしましたが、寺田先生は頑として譲りませんでした。真意を聞けずじまいでしたが看護教育に対する先生の理解の深さとやさしさを感じた次第です。

2008年4月、臨床福祉学科に教職課程を新設しました。「高等学校教諭1種免許状（公民、福祉）」「特別支援学校教諭1種免許状（知的障害者、肢体不自由者、病弱者）」の免許状が取得できる教育課程です。臨床福祉学科をより魅力的なものとするため、福祉に強い教員の養成が急務だと考える、学科長の石川秀也先生をはじめ、臨床福祉学科の教員の熱い思いが実現したものです。教職課程に進む学生たちは、特に、子どもたちの教育に携われることに特別な喜びを感じています。特別支援学校で活躍する卒業生も登場しており、教職課程を率いる白石淳先生の情熱の輪が確実に広がっています。

そして、2010年からは、プライマリケアに携わるナースプラクティショナーの養成に着手しました。理由は過疎化・高齢化が進行する北海道が必要としているからということと、アメリカでのナースプラクティショナーの経験がある塚本容子先生がいたことに尽きますが、何よりも、行動目標に照らしてこの冒険を許してくれている本学に感謝したいと思います。ナースプラクティショナーの登場までにはまだ時間がかかりそうですが、すでに7名の修了生を出しており、まずは、その前段としての特定行為に係る看護師の研修制度の法制化を待っているところです。

<卒業生の活躍>

卒業生の活躍については、臨床福祉学科では、大原裕介さんをはじめとする“ゆうゆう24”の活動にみられます。最初は障害を抱える親にレスパイトとケアを提供する北海道医療大学ボランティアセンターから始まり、対象者を地域のニーズに応じて高齢者、一般住民へと広げながらNPO法人、そして社会福祉法人へと進化し、卒業生が職員として励んでいます。そのミッションの一つに地域に創るのではなく「地域を創る」とあります。「新医療人育成の北の拠点を目指す」という本学の行動目標が、卒業生の活躍により達成できていることを嬉しく思うと同時に、誇らしさを感じています。

看護学科では、病院や包括支援センターなどでリーダーとして活躍する人や、看護系大学で教鞭を執る人が増えてきています。認定看護師研修センターの修了生の優れた実践での活躍はもとより、本学研究科の修了生が臨床で専門看護師として医療の質の向上に貢献している他、多くの看護系大学で教授・准教授・講師・助教として活躍しています。看護と福祉のキャリアデザインを構築するうえで本学は最強の大学の一つであると自負しています。

学部再編問題について

2009年度（平成21）に「2020行動計画」（緊急アクションプラン）の一つである「学部再編・新分野設置」プロジェクトにおいて、看護学科と臨床福祉学科をそれぞれ独立させるという案が出されたことがあります。これは、学生確保にかんがみ、独立させた方がそれぞれの学問の特徴が明確となり、受験生にもわかりやすいのではないかという発想からだったと思います。看護と福祉の教員で再編のメリット、デメリットを出し合いながら議論を重ね、最終的に「看護福祉学部」でやっていくという結論を出しました。看護福祉学部には看護は福祉を、福祉は看護をというキャッチコピーがありますが、長年共に歩んできた中で、看護にとっては福祉の広い視野と寛大さが、福祉にとっては看護の真っ向勝負で突き進むパワーが魅力的であり、2つの学科がそれぞれ影響し合って良いバランスを保っているのではないかと思います。

初代、学部長の中島紀恵子先生の看護福祉学部開設の理念と構想に触れて、改めて、看護福祉学部として歩む意義と、学部の理念を具現化する企画が必要だと思うところです。

記憶の断片を拾って、思いつくままに、綴ってしまいましたが、地域住民のニーズに応える看護福祉学部は、教職員、学生、地域住民の力を結集して、まだまだ進化していくと確信しています。

看護福祉学部沿革

1984年	2月	学校法人東日本学園大学設立
1993年	4月	看護福祉学部（看護学科/医療福祉学科 医療福祉学専攻・臨床心理専攻）開設
1994年	4月	学校法人名称・大学名称変更（学校法人東日本学園・北海道医療大学）
1997年	4月	大学院看護福祉学研究科 看護学専攻/臨床福祉・心理学専攻修士課程開設
1999年	4月	医療福祉学科を臨床福祉学科に名称変更、臨床心理学分野は心理科学部臨床心理学科へ改組
2004年	4月	大学院看護福祉学研究科 臨床福祉学専攻修士課程、博士課程開設。臨床心理学分野は心理科学研究科。臨床心理学専攻に改組
2005年	4月	認定看護師研修センター設置
2008年	4月	看護福祉学部臨床福祉学科教職家庭の設置

歴代学部長

1993年	4月	中島紀恵子
2001年	4月	高橋章子
2003年	4月	阿保順子
2007年	4月	野川道子
2013年	4月	平典子

引用文献

中島紀恵子（2013）看護福祉学部の創設をかえりみて～20年を振り返り20年先を見据えて～， 9（1）， 3-9.

A historical overview of School of Nursing and Social Services

Michiko NOGAWA

